



昔から大切にされている
神仏習合の文化と慣習

おの 小野

目と鼻の先の十川村ではなく、昭和村に属していた。

国道381号の十和トンネルを西に抜け、左手に目をやると、緩斜面に広がる集落が現れる。小野である。

小野の北西対岸の十川とは目と鼻の先の近さである。この位置関係を見れば、小野は元々十川村に属していたのだろうと思いきや、昭和村に属していたのである。しかし、聞けば「経済圏としても、人の交流にしても、十川との関わりが密接だった」という。

休校で子どもたちはニンマリ!・・とはいかず。

国道から小野へと架かる抜水橋の下方に沈下橋跡が残る。ここに架かっていた沈下橋は橋桁が低かったため、増水時は沈みやすく、渡れない事態になることも多かった。しかし、小野には商店もあり、また、2kmほど下れば十川の沈下橋を渡れたことで「何とかなった」という。ただし、児童たちはそうはいかない。小学校は対岸の久保川にある。増水したからといって、大人のように十川を回って行くわけにもいかない。川を渡って通学する他の地区同様、休校となり子どもたちはニンマリ!・・とはいかなかったのが小野であった。十川の沈下橋を渡って、教員が授業をしに「来てくれた」というのだ。当時の子どもたちの複雑な心情を聞いて笑ってしまった。



沈下橋ができる前は「竹の浮き橋」だった(小野集会所にある写真より)

今も残る典型的な神仏習合の文化

十和地区の耕地面積第2位が小野である。しかし、小野には大きな谷がなく、昔から人々は小さな谷の水を溜池に集めるなどの工夫を凝らし耕作してきた。主な作物は、キビや芋。さらに養蚕も盛んであった。小野の養蚕農家は、母屋・炊事場・作業場などの配置がだいたい同じで「祭時などで酒に酔った人が家を間違えることがよくあった」という。

近代に入って、農業用水を川から汲み上げることが可能になり、米作も盛んになった。

産土神は曾我神社である。元は四万十川近くにあったが、明治23年の大洪水の後、現在の場所に移された。隣には常楽山 願成寺と八坂神社がある。今も昔も、寺社が祭事を共にすることが多く、一体感がある。まさに神仏習合である。願成寺は、廃仏毀釈令によって、明治4年にいったん廃寺となったが、なんと10年も経ずに復興。これだけのスピード復興を果たせたのは、小野の人々が神仏習合の文化を大切にしてきたことと無縁ではあるまい。

町のうごき

(12月31日)	人	口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	7,399	-27		男 3	20	8	18
女	7,998	-14		女 1	15	14	14
計	15,397	-41		計 4	35	22	32
世帯数	8,067	-14		(12月中の届出)			
窪川地域 10,961人		大正地域 2,114人		十和地域 2,322人			